

二子山古墳の試掘調査の概要

2017.9.22

調査場所	京都府宇治市宇治山本 42	遺跡名称	二子山古墳（ふたごやまこふん）
調査担当	宇治市 都市整備部 歴史まちづくり推進課		0774-21-1602
調査理由	遺跡の内容、範囲確認を行うため（国庫補助事業）		
調査期間	平成 29 年 7 月 11 日 開始 ~ 平成 29 年 10 月 13 日 終了予定		
試掘面積	約 56.4 m ²	掘削深度	約 0.5m
検出遺構	墳丘 大型の掘り込み 土坑 石列 素掘り溝		
出土品	古墳時代の埴輪 近世・近代の陶磁器・瓦 など		

1、宇治の古墳時代

古墳時代はヤマト王権によって日本列島の国家形成がなされ、巨大な前方後円墳を築造してその権力を誇示した時代です。京都盆地の東辺の丘陵には、木津川市の椿井大塚山古墳や城陽市の久津川車塚古墳、桃山丘陵の黄金塚 1・2号墳など、木津川の氾濫原や巨椋池を避けて丘陵の裾に沿って京都盆地を南北に行き来する人々にその威容を見せつけるように巨大な前方後円墳が築かれます。

宇治は宇治川の渡河点として交通の要衝であったと考えられます。宇治では古墳時代の前期に三室戸の丘陵頂部に観音山古墳、中期に宇治二子山古墳や五ヶ庄の瓦塚古墳といった 30～50m規模の円墳が築かれ、後期には五ヶ庄に 110mの前方後円墳である二子塚古墳が築かれます。また、中宇治では古墳時代中期に最先端の技術を伝えた渡来人の残した朝鮮半島の土器が出土しています。『日本書紀』には皇位継承の有力な候補者であった応神天皇の皇子で木幡出身の母をもつ菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）の物語を詳述するなど、ヤマト王権における宇治の重要性を窺うことができます。

2、二子山古墳の調査の経緯

二子山古墳は、宇治川右岸にある仏徳山から小さな谷を挟みながら北にのびる丘陵の頂部にあります。古墳は通称「二子山」と呼ばれる丘陵の尾根に沿って 2 つ並んで築かれており、『日本書紀』にある菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）の墓として語られることもあったようです。

昭和 43 年に土砂採取工事が発端となり、発掘調査が行われました。調査では北墳が 5 世紀中頃に造られた直径 40mの葺石・埴輪列を備えた円墳で、南墳が 5 世紀後半に造られた円墳であることを確認しました。埋葬施設の調査もおこなわれ、北墳からは青銅鏡・玉類をはじめ甲冑や刀剣、鏃、農工具類が出土し、南墳からは青銅鏡・玉類・甲冑と多量の武器や馬具が出土しました。土砂採取工事は中止され、これら多量の副葬品類は古墳時代中期の首長墓の様相を示す代表的なものとして、京都府の有形文化財に指定されています。

宇治市では古墳の保存を検討するために、昨年度から試掘調査を実施しています。昨年度の調査では南墳が円墳であることを確認しました。今年度は、北墳の北側の平坦面で調査を実施しました。

3、発掘調査の目的

二子山古墳は、南の仏徳山から北にのびる丘陵の尾根の頂部に 2 基の円墳が南北に並んでつくられており、北墳の北側にのびる尾根の上面が平坦になっています。古墳には「造り出し」と呼ばれる舞台状の土壇を墳丘に造りつけ、そこで祭祀を行っている例が多くみられます。北墳の北側の平坦面にも同様の祭祀施設がある可能性が考えられます。そのため造り出しの有無を確認する目的で平坦面に幅 1 ~ 1.5m、南北長 16m、東西長 16mの調査区を十字に設けて発掘調査を実施しました。

4、発掘調査の成果

墳丘流土を取り除くと、平坦面上で耕作に伴う素掘り溝と、南北にのびる石列、北墳の墳丘を確認しました。

素掘り溝は後世の耕作に伴うものと考えられます。石列は墳丘裾から 4mほど外側から南北に並びます。

墳丘は裾から約 1 mの高さまでは地山を削りだし、その上は周辺の山土を盛ってつくられていました。

石列と素掘り溝の下で、南北幅 5.6m、東西長 10m、深さ 0.73mの大型の掘り込みが見つかりました。この掘り込みは墳丘の裾から約 2 m外側に尾根に直行する方向に掘られ、墳丘に面する南辺は、東半部が墳丘に沿って弧を描きます。掘り込みは東辺が緩やかな斜面になっていて、底は平坦になっています。埋土は周辺の山土と同じ土です。底部付近にも自然に埋まったような痕跡がみられないことから、一度に埋め戻していると考えられます。

掘り込みの外側 2 mほどのところでは直径 0.4m、深さ 0.7mの土坑を確認しました。ほぼ真っ直ぐに掘り込まれていて、底面は平坦です。埋土は黄褐色砂質土 1 層でした。東西方向に調査区を拡張しましたが同様の土坑は確認できませんでした。

5、出土遺物

墳丘流土と、後世の耕作土から、埴輪や須恵器、近世陶磁器が出土しました。埴輪片は細片で形が分かるものはほとんどありません。陶磁器は、播鉢や染付の破片が出土しています。

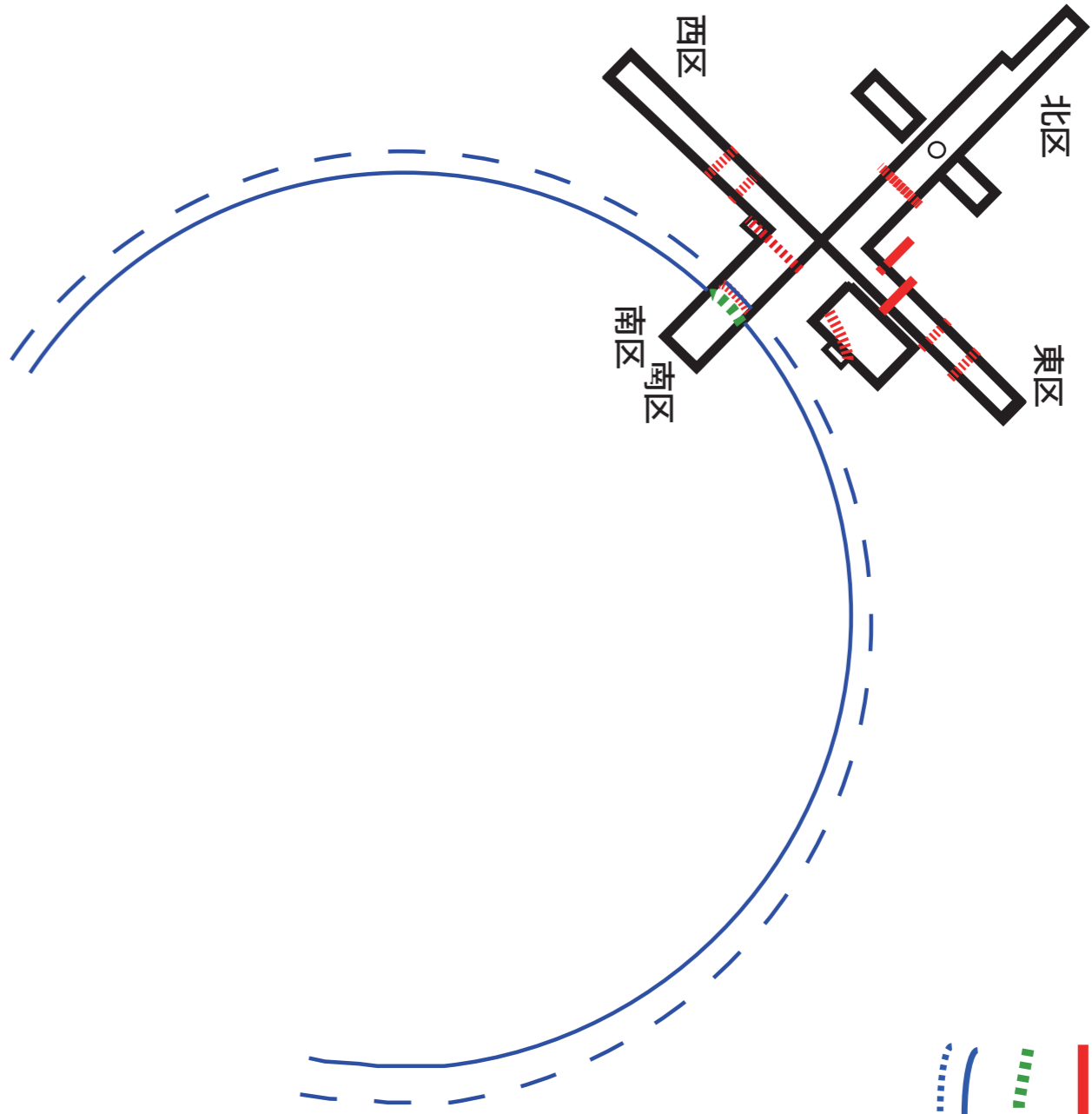
6、まとめ

今回の調査では、北墳の墳丘とその裾部を確認することができました。墳丘裾にあたる傾斜変換部は、昭和 43 年の調査成果から復元される墳丘裾とほぼ同じ位置になります。しかしながら、昭和 43 年の発掘調査で墳丘の南側で確認されていた葺石や裾をめぐる埴輪列の痕跡を見つけることができませんでした。裾部の直上に堆積する礫層から 16 ~ 17 世紀の瓦器片が出土しており、後世に削平を受けている可能性も考えられます。

墳丘の北側の平坦面では、当初その存在が予想された造り出しを確認することができませんでした。平坦面にあった大型の掘り込みや、円形の小土坑は、埋土に遺物を含まないことから時期を確定することはできませんが、埴輪片を含む墳丘流土の下に埋まっていたことから、墳丘が崩れる前には埋められており、古墳に伴う何らかの施設である可能性もあります。このような掘り込みが確認された古墳があるのかも含め、類例を探していきたいと思います。

昨年度からの 2 回の発掘調査で、二子山古墳は円墳であることが確認できました。出土する埴輪の量も少なく、南墳は葺石を施さないなど、同時代の他の古墳と比べると墳丘自体は簡素な印象を受けます。しかしながら、宇治川の渡河点という交通の要衝を見下ろす立地や多種多量の豪華な副葬品は、被葬者が重要な役割を果たした人物であることを窺わせるものです。今後は、他の古墳と比較検討をすすめ、二子山古墳の歴史的な意義を明らかにして、貴重な古墳を後世に伝えていけるよう、取り組んでいきたいと思ひます。

- 調査区
- ⋯ 掘り込み
- 石列
- ⋯ 確認した墳丘裾
- ⋯ 墳丘裾・埴輪列
- ⋯ 想定ライン



● ●
北区